ハンター募集！

黒い夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハンター募集！

【Ｎコード】
Ｎ４４７１Ｇ

【作者名】
黒い夢

【あらすじ】
新しい村を作るためのハンター募集の知らせ。その場所は7年前に捨てられ廃村となったはずの故郷だった。自らが帰る場所を掴み取るため、１７歳の少年・トウマが名乗りを上げる！※モンハンのＦＦです。読者参加企画も考えています、新しい村で貴方もハンターになりませんか？※８／１３、【八人目】を書き直すために一時的に削除しました。読者の皆様を混乱させてしまい申し訳ありません。近日修正したものを投稿します。

プロローグ（前書き）

大人気ゲーム『モンスターハンター』のファンフィクションです。

【注意、お願い、その他】

・ストーリー重視ですので、なかなか狩りに行かないかもしれません。ご了承ください。

・途中からいろいろ募集します。是非参加してください！

・世界観はなるべく壊さないように頑張ります。また、モンスターの強さもなるべく忠実に書くつもりです。

プロローグ

とある街のハンターズギルド。
掲示板の前に立ち、一枚の張り紙を見つめる少年がいた。
『新しい村を作るための、ハンターを募集します！』
細かい説明が長々と書いてあるが、要約すればただそれだけの内容。
ありふれたとまでは言わないが毎年二、三回は見かける依頼。
だが、少年はその張り紙に手を伸ばす。そして七年振りに足を向けた。
かつてモンスターによって滅ぼされた、彼の生まれ故郷へと。

一人目：少年と猫（前書き）

サブタイトルの『一人目』は、『一話目』のかわりです。
数がすごく増えても気にしないでください。

一人目：少年と猫

山肌に沿った獣道を二つの影が歩いていた。少年が一人とアイルーが一匹。
少年の名前はトウマ・スオウ。年齢は十七歳で、黒曜石のような硬質の黒髪と夜空を思わせる深い藍色の瞳をしている。
顔つきにはまだ幼さが残っているが、彼の眼には不思議な光が宿っておりむしろ年齢にそぐわない落着きのようなものが感じられた。
身につけているのはモンスターの毛皮を多用した茶色の防具、腰には鉱石を材料にした片手剣を差していて同じ材質の小さな円形の盾も持っている。
それらの装備を見れば分かるように、トウマは【ハンター】だった。

――ハンターとはモンスターの脅威から村や街を守り、人間の生活圏を確保する最も危険な職業だ。
大抵のハンターは【ギルド】というハンター活動支援組織に所属しており、そこで仕事を斡旋してもらって生計を立てている。
これらの仕事は【クエスト】と呼ばれ、内容も危険度も多種――護衛、採取、討伐、調査など――にわたる。街の外で行う行動は全てハンターの仕事だと言っても過言ではないのだ――

だが、今回のトウマの仕事は厳密にはクエストではなかった。
ギルドを通した依頼には違いないのだが、今の彼の目的はこれから向かう村の発展を助け、襲い来るモンスターを退けて、新しい村をつくること。
そのため明確な期限や達成条件というものが存在しない――クエストと言う区分では括れない大仕事である。
そして同時に、今回の依頼に対してトウマ自身も仕事の域を越えた熱い思いを抱いていた。

実は依頼をしてきたレッカ村とは、彼の生まれ故郷――かつて、大自然の脅威によって滅びたはずの村だったからである。

七年前のことだ。村でただ一人のハンターだった男がクエストの際に負った傷が原因となって引退することとなった。
当然新しいハンターを募集したのだがこんな辺境に来る物好きなどそうそういない。方々に手を伸ばしたが結果は全滅、近くの森に飛竜が住み着いたとの知らせが決定打となって村は捨てられたのだ。
トウマはようやく十歳になったばかりだった。

※

「ふう。あと少しかあ」
背負った大荷物を苦にせず軽快なペースで歩き続けるトウマ。
竜車を何度も乗り継ぎ一ヶ月かかってようやく近くの村にやってこれた。そこから更に二日も歩きどおしである。だが、彼は疲労など全く感じていなかった。逸る心に今にも踊りださんばかりである。
（あ、あの山は……！！）
ちょうどその時、木々の切れ間から遠くにそびえたつ山々が見えた。ぼんやりとした記憶だが、山脈の形になんとも言えない郷愁の念が沸き上がってくる。
両親と一緒に乗った竜車の中で、トウマは小さくなっていくあの山をずっと見つめていたのだ。もう二度とこの景色を見ることはないのだろうと、幼いながらに理解していた。
けれど、トウマは再びこの地に戻ってきた。恐怖に怯えるだけの無力な子供ではなく、村を守る一人前のハンターとして。
「あの山が見えたってことは、そろそろ見えてくる頃かな」
「ニャ？　もう着くのかニャ？」
在りし日の故郷の姿を脳裏に思い浮かべぽつりと呟いたトウマの言葉に、隣を歩く【アイルー】が反応した。

名前はアップル。その名のとおりリンゴ色の毛並みをしていて、身長はトウマの腰の高さほど。立ち上がった猫のような大変愛らしい容姿をしている。

――アイルーとは高度な知性を持つ獣人の一種で、人間の言葉を話すことができ、基本的に人間に友好的な種族だ。現在も多くのアイルーが人間社会に混じり様々な場所で活躍しているが、ハンターがアイルーを連れている場合はたいてい二通りしかない。【キッチンアイルー】か【オトモアイルー】だ。

キッチンアイルーというのはハンターの私生活を支援することを職務としたアイルーで、特に彼らが作る料理は一時的に身体能力や特殊能力が身につくと言われるほどの絶品なのだ。その腕前を称えて『キッチン』アイルーと呼ばれている。

逆にオトモアイルーとは狩りの時の『オトモ』をするアイルーのこと。もともとハンターの真似事をするアイルーも昔からいたのだが、アイルーの中でも変わり者扱いされ、極めて稀な存在だった。

だが、長い長いハンターとの蜜月がついにアイルーの狩猟本能に火をつけ、近年ハンターを目指すアイルーが急増。ハンターと一対一でコンビを組んで、直接狩猟の指導を受けることを条件にギルドもアイルーのハンター界進出を認めたのである。

なお、どちらのアイルーに関しても、ハンターへの支援の一環とし賃金の全額、もしくは一部をギルドを負担してくれる。よほど高級な食材を使いでもしない限り、アイルーのサービスは基本的にすべて無料である。

こうしてアイルーは多くのハンターの心強い仲間となっているのだが、アイルーの紹介には『ネコバア』と呼ばれる老婆の橋渡しが必要となっている。この老婆の審査を通り人格や功績が認められれば雇えるアイルーの数も増えていく。結果として、アイルーを数多くつれて歩いていたり、オトモアイルーを立派なハンターに鍛えることが一種のステータスとなっているのが現状である――

「まだ距離はあるはずニャのに、もしかしてもらった地図が間違っていたのかニャ？」
アップルが腰のポーチから地図を出そうとする。
その姿はどんぐりを大きくしたような鎧を身につけており、自分の身長と同じくらいの大きさのピッケルを持っていた。アップルはオトモアイルーなのだ。
「あ、違う違う。村までもうちょっとあるけど、この辺りの高台から見渡せるはずなんだよ」
アップルが地図を確かめると、確かに村に行くには谷をもう一つ越えなければならなかった。
だが、谷底や向かいの山の中に入ってしまったら木が邪魔で見えなくなるだろうが、ここからならば村を一望できそうである。
「……ああ、もう我慢できないっ！」
「ニャアッ！？　ト、トウマ！？」
懐かしの故郷の姿に辛抱しきれず、ついにトウマは駆け出した。
目についた手頃な大きさの岩の上に飛び上がり、新しいレッカ村の姿を瞳に映す。
「う、うわぁ……」

――かつてのレッカ村は山腹につくられた小さな村だった。
だが、周辺に巨岩がゴロゴロ転がっていてそれらが大型モンスターを締め出す天然の要塞となっていた。さらに、小型、中形モンスターが隙間から入ってこないよう岩と岩との間には何重にも背の高い柵が作られ、もし柵が壊されたら大きな音が出るような仕組みも作られていた。
辺境だからこその過剰なまでの防御力。空から襲い掛かってくる飛竜たちにさえ気をつければ大変安全な村だったといえる。
それが――

「……ち、……ちっちゃい」
年輪のように広がっていたかつての勇姿はもはや面影すら残っていなかった。
長い年月で柵が朽ちてしまったのだろう、遠目でも真新しい二重の囲いがなんとかある程度。さらに、村の広さそのものもかつての三分の一くらいしかない。
「頼りないニャ」
「……うん」
アップルの率直な言葉に反論できなかった。
無事にレッカ村のハンターになれたら、まずはもっと柵を作るべきだろう。
「いや、その前に家の修理かな？」
朽ちた廃屋が立ち並ぶ一角で、谷に近い数軒の家の煙突から煙が出ている。
おそらく街道に近いあの辺りが最初に復興した場所なのだろう。少年が住んでいた家はちょうど反対側なので、まず自分の住む場所を確保しなければならない。
「大変そうニャ」
「……うん」
ため息が漏れそうになる。
（だけど、昔の村の基礎が残っているだけ、完全に新しい村をつくるよりは楽、……かもしれない）
トウマはそう思いこむことにした。

※

あまりの光景に衝撃を受けたとはいえ、目的地に本当に人がいるのだと知れば足取りも軽くなる。
谷を一気に駆け下り、意気揚々と村に向かおうとしたトウマ達の前に一人の少女が姿を見せた。道の脇にある森の中から出てきて両手

いっぱいに薪を持っている。
少女の背はトウマより頭一つ分は小さかった。年も同じか少し年下、おそらく十五～十七歳だろう。
澄んだ海のような青い瞳に日光を反射して白金に輝く髪。丁寧な顔の作りをしていて美少女と呼ぶにふさわしい。だが少し釣り目がちで、気位の高い猫を連想する。同じ猫でもアップルの方が愛嬌があるなと、トウマは思った。
（あれ？　……この子、ハンターだ）
少女が見につけているのはモンスターの鱗を加工して作られた碧い防具だった。腰に差してあるのもトウマのと同じような片手剣。どこからどう見てもハンター以外の何者でもない。過酷な職業である故、女性のハンターは珍しかった。
「こ、こんにちは！」
「こんちはニャ！」
とりあえず挨拶をする一人と一匹。こんな辺境にいるのだ、トウマと同じようにレッカ村の依頼に応えたハンターだろう。
これから長い付き合いになるかもしれないのだから、最初の挨拶はとても大事だ。
「……ふんっ！」
だが、少女は何も言わず再び森の中へと消えてしまった。
あまりの態度に呆然とするトウマたち。
「……な、なんだったんだ、今の……」
「ニャ、ニャア。……多分、恥ずかしがりやさんなのニャ」
ショックでヒゲをピクピク震わせながら、アップルがなかなか健気なことを言う。
「そ、そうだといいね」
「……」
「……」
「……行こうか」
「……ニャ」

とりあえず見なかったことにしてトウマたちは村を目指した。

二人目：初恋の思い出

「すみませーん！　依頼を受けたハンターでーす！！」
門の前に立ち、大声を張り上げ備え付けの鐘を鳴らす。
鐘は柵のところどころについているのだが、これらは柵と紐で結ばれていて、すべて音色が違う。壊された時に鳴った鐘の音で、モンスターの侵入した位置を知らせる工夫なのだ。
もちろん、来客が来たと教えるのにも役立つ。
「あ、は～い、今行きます！」
すぐに若い女性の声が返ってきた。二重の囲いだから防護力は低いが、そのぶん声はよく通るらしい。
門が開いていく。

出迎えたのもハンターだった。
白い鱗を用いた防具一式と、同じく白いもこもこがついた弓を担いだ、少女と呼ぶのが相応しい歳の頃の女性だった。
真夏に生い茂る葉のような深い緑色の髪を腰までのばし、瞳はエメラルドの如く輝く明るい碧。
人当たりの良い温和な笑みを浮かべていて、トウマよりもほんのわずか年上に見える。

「レティ！？」
その人を前にして、トウマは驚きの声を上げた。
彼女の名前はレティ・トートス。
かつてレッカ村を護っていたハンター、ハダン・トートスの娘で、トウマの初恋の女の子でもある幼なじみ。
本当に小さい頃の話だが、結婚の約束のようなものまでした気がする。
「な、なんでレティがここに？　っていうかその格好は何？」

思いがけない再会に興奮を隠せないトウマ。
「え？　あ、あの？」
だが、レティは当惑の表情を浮かべた。
（……昔よく遊んでいたのに、覚えていないのかな？）
完全に忘れられていたらどうしようと思いながら、トウマは彼女に向き直り、しっかり目を合わせて名乗った。
「トウマだよ。僕はトウマ・スオウ。久しぶり、レティ」
「……トウ、マ……スオウ？」
でも、やっぱり首を傾げるレティ。聞き覚えはあるのに思い出せない、と言いたげな様子だ。
「あ、あんなに仲良かったのに、覚えてないの……？」
小さい頃レティと一緒に遊んだことはトウマの大切な思い出だったが、彼女にとってはそうでもなかったのだろうか。焦る気持ちを抑えて、なんとか思い出させようとする。
「えと、ほら。昔よく一緒に遊んだろ。向こうの方に僕の家があってさ……」
「……もしかして、雑貨さんのところの？」
「そ、そう！　そこの家のトウマ！」
思い出してくれたのかと喜ぶトウマ。
「私の誕生日プレゼントに、ランゴスタの卵をくれたトウマくん？」
「……へ？」
笑みは凍った。
「違うの？　ほら、すごく綺麗な宝石を見つけたからって……」
「あ、いや……あげたような、あげなかったような……」
ちなみにランゴスタとは人間と同じ大きさくらいの蜂だ。その卵は真っ赤な宝石のようでとても美しいが、当然しばらくすると幼虫が出てくる。
「あとは……畑に撒くんだっていって、モンスターの糞を頭からかぶっちゃったトウマくん？」
「……そ、そんなことも、あったかもね……」

確かに記憶にある。運んでいる途中に重くて転んでしまったのだ。
レティに言われるまですっかり忘れていたのだけれど。
「その後、おじさんに怒られるからって、お父さんの毒ビンを勝手に持ち出して畑にまいちゃったよね？」
「……し……した、かもね……」
紫色で綺麗だからきっとおいしい野菜ができるだろうって思っていた気がする。当然、全部ダメになった。
「私がお父さんからすっごく怒られて泣いちゃった時に言ってくれたこと、覚えてる？」
「……『おおきくなったら……け、けっこんしてあげるから、なきやんで』……」
話をしていて詳しく思い出した。なんで昔の僕はこんなに上から目線だったんだろうかと、恥ずかしすぎて死にたくなった。
だが、レティの話はまだ続きがあった。
「……それで、私は、なんて言ったか覚えてる？」
もちろんトウマは覚えていた。正確にはたった今思い出したのだが、どちらにしろ口にするのも畏れ多い。
なのに、レティは期待に満ちた瞳でトウマを見つめている。
恐る恐る、少年は口は開いた。
「な、何も言わずにわんわん泣きだした、かな……？」
「……！！」
レティが驚いた顔をする。
「トウマ……いくらなんでも、酷過ぎるニャ……」
「……そうだね……」
本当ならトウマだって言いたくなかった。
泣かれるほど嫌だったのかと悲しくなった子供の頃の思い出は、長い年月ですっかり美化していたらしい。
黙って横で聞いていたアップルがそう呟くほど、ろくな思い出がなかったのだ。
（……思い出して、ほしくなかったかも……）

もう遅いが、今からでも別人だと言いたくなる。
トウマが落ち込むのだが。
「……本物のトウマくんだ！！」
だが、レティは歓喜の声をあげてトウマに飛びついてきた。
「うわっ、ちょ、レティ！？」
「ニャア！？」
トウマとアップルが仰天するほど喜び、七年ぶりに再会した幼なじみを抱きしめる。
「すっかりカッコ良くなっちゃったねぇ！」
「え、いや、あの、……お、落ち着いて……」
恥ずかしがってトウマが離れたようとするが無理だった。女性とはいえレティもハンター、筋力はかなり強い。
「あんなにやんちゃだったトウマくんも、立派になったんだね」
「そ、そんな、別に僕は……って、うぷっ」
「ああ！　本当にまたトウマくんに会えるなんて、夢みたい！」
感極まったレティの両手がトウマの頭を抱える。そのまま顔を胸に埋めるような体勢になってしまう。
「え、何この力！？　って、息が、息が……！」
「ト、トウマ？　しっかりするニャ！」
抱きかかえられた体勢のまま、トウマの両手が空を掴む。アップルはその周りをグルグルと周りだけだ。
「トウマくん、久し振り！　会えて嬉しいよ！！」
「む、むがー！！」
「ニャアア！　トウマー！！」
……必死の抵抗もむなしく、トウマはレティの豊満な胸で溺れてしまった。
その顔は大変安らかであったと、アップルは語る。
※

一面のお花畑。
たくさんのアイルーが出てきて、輪になって踊り始める。
その中心に一匹のアイルーが出てきて頭を下げた。
「次回作にご期待くださいなのニャ」

≪完≫

※

「……あ、あれ。ここは？」
トウマが目を覚ますと、見知らぬ部屋のベッドで横になっていた。
（おかしいなぁ。どこかのお花畑でたくさんのアイルーに囲まれていたはずなのに？）
一体、いつのまにこんな場所に来たのだろうか。
「ニャア、ようやく気がついたのかニャ」
「トウマくん、大丈夫？」
「え？　あれ？」
首を傾げるトウマにアップルとレティが声をかけた。ベッドの横の椅子に座ってずっと見守っていたのだ。
「レティ？　えええ！？」
「お、落ち着いて、トウマくん。ここは私の家よ」
混乱するトウマの両手を握り、ベッドに横になっているように言うレティ。
「……ここが、レティの家？」
「そうよ、だからゆっくりしてね」
幼なじみの少女の温かい微笑みにようやく落ち着きを取り戻し、興

味深げにキョロキョロと部屋の中を見ながら質問をした。
「……僕、なんでここにいるの？」
「トウマくんはね、この村に着いた途端気を失っちゃったの。多分、気がゆるんで旅の疲れが出たんじゃないかな」
「あ、そうな……のかな？　そんなやわな鍛え方はしていないはずだけど？」
「私と話をしていて突然気を失っちゃたんだよ？　怪我とかもないし、お医者さんもただの過労だろうって」
「ふーん……？」
いま一つ納得できない様子のトウマ。おぼろげな記憶だが天国と地獄を垣間見たような気がしたのだ。
「……ううん、はっきり思い出せないなぁ……」
それが、なぜかとても悔しかった。
「無理しちゃダメだよ。今は体を休めないと」
レティが心配そうにトウマに注意する。
（……い、言ったほうがいいのかニャア……でも……）
ベッドの脇にいたアップルは、二人の様子を見てあえて何も言わなかった。
レティの説明で話がまとまるなら変な波風を起こさなくていいだろう、という大人の判断である。

※

「……うん、もう顔色もいいみたいだね。お父さんを呼んでくるからそのまま待っていて」
トウマの体調を見て、大丈夫だろうと判断したレティが立ち上がる。
「おじさん？　……ハダンさんもこの村にいるの？」
（ハンターは引退したはずだから、今は何をしているのだろう？）
そう思ったのだが、レティに笑われてしまった。
「やだ、トウマくんったら。お父さんは村長なんだから当たり前で

しょ」
「えっ。……ご、ごめん！」
「そういうところ、昔から変わらないね」
くすくすと笑みをこぼしながらレティは部屋を出て行った。
「……アップル。依頼書、見せてくれる？」
「はいニャ」
ポーチからすぐに取り出された紙の束をめくる。たしかに依頼人の欄に『レッカ村の村長、ハダン・トートス』と書いてあった。
普段はこんなことないのに、レッカ村の名前を聞いて舞い上がっていたらしい。

三人目：大きな腕

「やあやあトウマくん！　よく来てくれたね！」
言われたとおりトウマがベッドで横になって待っていると、五十歳ほどの男性が部屋に入ってきた。
レティの父親、ハダンだ。
娘と同じ色の瞳と少しだけ白髪が混じっている髪をしたにこやかな人で娘によく似ている。
「ハダンさん！」
「そのままでいいよ。何でもついた途端に倒れたそうじゃないか、無理はいけない」
慌てて起きようとしたトウマをハダンが止める。
「あ、そうらしいんです。僕もちょっと記憶が曖昧で……」
「診察結果も聞いているよ。今日はゆっくり休んでくれたまえ。……しかし、久し振りだね、トウマくん」
握手をしようとハダンが右腕を差し出した。けれど、左腕はピクリとも動かない。
（ああ、そうだ……）
思い出した。例の怪我が原因でハダンの左腕が動かないのだ。
レッカ村は彼の大きな腕に包まれていたのだと改めて実感し、握手をする手にも自然と力が入った。
「お久しぶりです、ハダンさん」

※

「それで、レティの方から少しは説明を聞いたかね？」
「いえ、何も」
「そうか……まあ、村長は私だからね。もう一度依頼内容の説明をさせてもらうよ」

「はい！」
さっそく依頼の内容を確認する。アップルも一緒になってハダンの話を聞いた。トウマがこの村のハンターになるのだから、彼も今後はここに腰を据えるつもりなのだ。

ハダンの説明は依頼書に書いてあったのと大差変わりがなかった。その内容に交えて二三の新しい情報と注意事項を教えられただけだった。

まず、村はまだ小さいので、施設は雑貨屋と鍛冶屋くらいしかないということ。
ハンターズハウスすらないので、ハンターは全員村長の家で寝泊まりしてもらうらしい。今トウマが寝ているこの部屋が、まさに彼に割り当てられた部屋だそうだ。家具をよく見るとアイテムボックスや装備を収納する棚などもあり、確かにハンター用の部屋となっていた。

次に現在レッカ村に居るハンターの話。どうやらトウマ以外に二人。
一人目は当然レティ・トートス。
この村がなくなった後、トートス親子はハダンの知り合いのハンターが住む北の方の村に移り住んだそうだ。そこでハダンの後を継ぐための修行をして、新レッカ村のハンターとなったらしい。

二人目はマナ・ファイダリア。
話を聞くと、やはりトウマがこの村に来る途中に出会った少女だった。
ハダンの知り合いというハンターの末の娘らしい。レティとは実の姉妹のように育ち、再興の手伝いをすると言ってこの村に残っているそうだ。

また、ギルドから狩り場の認定を受けているのは歩いて往復しても半日ほどの距離にある、丘陵地帯のみ。
近年はこの村の周辺にも続々と新しい村ができているので、そのうち新しい狩り場が開かれるだろうと言っていた。そうしたら村ももっと発展するし、ハンターの仕事も増えることだろう。

「あの、ハダンさん？」
大体の話を理解してトウマだが一つ疑問あった。
「今、二人もハンターがいるんですよね？　なんで三人目を募集したんですか？」

かつての旧レッカ村にハダンしかハンターがいなかったように、ほとんどの村にはハンターは一人しかいない。この村には二人いて、しかも姉妹のように仲が良く、武器も近距離攻撃の片手剣と遠距離攻撃の弓。コンビを組むのにぴったりだろう。
だというのに、その調和を乱しかねない新しいハンターを募集した理由とは何なのだろうか？
ある意味当然のトウマの問いに、ハダンは苦笑いを浮かべながら答えた。
「……実に簡単な話でね。二人の実力に不安があるからなのさ」

※

「マナにも会ったらしいなら、二人の実力のほども分かるだろ？」
「はあ、少しなら見当がつきますけど……」
頷くトウマ。ハダンの言うとおり、確かに彼は二人のだいたいの実力を見抜いていた。

ハンターの実力を判断する際、年齢や性別は無意味だ。
モンスターの狩猟で一番求められるのは経験に裏付けされた知識。

非力な女子供であろうと工夫次第で一流ハンターと呼ばれる存在になれる。
なので、普通は装備で実力を判断する。
ハンターは自分で集めた素材を鍛冶屋に持っていき武器や防具を作ってもらう。あえて弱い装備を愛する変わり種のハンターもいるが、命がけの戦いの場で少しでも生存率を上げる為に、普通はその時作れる最高の装備を揃える。
必然、そのハンターの装備を見ればどの程度の腕前かが分かるというわけだ。

二人の防具は、レティがギアノスシリーズでマナがランポスシリーズという防具だった。

それぞれ『ギアノス』と『ランポス』というモンスターの素材を使っていて、どちらも鳥竜種に分類される小型モンスター。鳥のような尖った嘴と竜のような硬い鱗を持ち、肉食で性格は好戦的。
鋭い牙による噛み付きと発達した後ろ足の筋力が生み出す跳びかかり攻撃がやっかいな相手だが、本当の危険は常に群れで行動するという事だ。
一匹くらいならば駆け出しハンターでも相手できるが、たいていは二匹〜四匹くらいの群を作っていて、完全に包囲されてしまえば命すら危うい。
また、それぞれの違いとして、ギアノスは寒冷な地に生息し鱗が白く、冷凍液を吐いて獲物の動きを鈍くしてくる。
ランポスは森や丘に生息していて鱗の色は青。これといった特殊な攻撃はしてこないが、ギアノスよりも体力がある。

これらの牙は武器の強化に、鱗や皮は軽くて丈夫で防具を作成するのに適していて、ランポスシーリズ・ギアノスシリーズはハンターがモンスターの素材で一番最初に作る防具とも言われている。

そういうと聞こえはいいが、ようするに初心者用防具なのだ。

ハダンに聞いて確認したのだがレティの弓はニクスファーボウ1、マナの片手剣はハンターカリンガ改という武器で、当然ながらこれも武器としては貧弱な部類である。

つまり、二人のハンターはまだまだ駆け出し、弱いのである。もしも飛竜に出会ったら、あっさりと殺されてしまいかねないほどに。

四人目：未熟者

トウマがハダンから説明を受けている間、レティは台所で夕食の準備をしていた。そこへ一人の少女が現れた。トウマが村へ来る途中に出会った少女、マナだった。

「ただいま姉さん。私も手伝うよ」

「あ、マナ。薪拾いは終わったの？」

「とっくに終わってる。……ねえ、量多くない？」

「え、そう？　少なくないかしら？」

二人の少女の前に積まれた食材はどう見ても五、六人分はあった。

「いつもこの半分ないよ」

「でも、トウマくんは男の子だからいっぱい食べると思うのよね」

「……トウマ？」

食材を保存庫に戻そうとしていたマナの手が止まった。

その手はかすかに震えているように見える。けれど、レティはマナの様子に気がつかず説明した。

「ほら、お父さんが新しくハンターさんを呼んだって言ったでしょ？」

「……あいつが、三人目、ってわけ？」

マナの脳裏に頼りなさそうな一人の少年の姿が浮かんだ。

やはりそうだったのかと、悔しさから、自然と拳を握りしめる。

（私と姉さんがいれば、三人目なんていらないのに）

マナはそう主張したのだが、ハダンは断固として聞き入れなかったのだ。二人ともまだ未熟だから、と。

「……姉さんは悔しくないの！？　これから一緒にこの村を守っていこうって言ってくれたじゃない！」

激情に駆られマナが叫ぶ。ここはレティの故郷なのだ。この村を守れるハンターになると、ずっと努力していた姿を、マナは知っていた。

だからこそ、どこの馬の骨とも分からないような奴の手を借りなければならない現状に、きっとレティも怒りを抱いていると信じていた。だが、彼女はのほほんとした顔で言った。
「実はトウマくんって、私の幼なじみで……初恋の人なの。また会えて嬉しかったわ～！！」
「……はああ！？　幼なじみ！？　初恋！？」
ハンターの誇りやプライドを蔑ろにするような言葉だ。しかも、二人が交わした誓いを忘れたような、その態度。
レティのために家族と別れこの村に留まっているマナにとって、裏切られたに等しい話だった。
「……な、なによそれ！　見損なったわ！！」
マナは料理の準備を放り出し、台所から飛び出していく。
その背中を、レティは追わなかった。
本当は彼女だってこんなことを言いたくない。姉妹みたいに暮らしてきたのだ、今のマナの心境もだいたいは分かっていた。去り際に見えた小さな光も。
「……でも、しょうがないじゃない」
今すぐ追いかければすぐに捕まえられるだろう。
だけど、その後どうする？
トウマを歓迎するように説得する？
あるいはマナに同調し、トウマを追い返せと父に言う？
そんなことは出来ない。
私たちに向けられる父の心配そうな視線、村を守ろうという決意に燃えるトウマの瞳、そして、私への怒りと、それ以上に自らの不甲斐なさに涙ぐまずにはいられないマナの気持ち。
全て見えているからこそ、彼女は動くことができなかった。
一人で、黙々と料理の準備を続けるだけだ。

※

その夜。
トウマは長旅で疲れているだろうからと歓迎会を開かなかったのに、多くの村人たちが料理と酒を手に個別に村長の家を訪れ、訪れた新しいハンターとアイルーを歓迎した。中には昔レッカ村に住んでいた人もいて、大いに再会を喜び合ったため、結局は飲めや歌えやのお祭り騒ぎとなってしまった。

けれど、マナは自分の部屋に閉じこもったまま、心配して訪れたレティにも顔を見せなかった。

五人目：歩く不協和音

翌日。
トウマ、レティ、マナの三人はハダンからの依頼で丘陵地帯に来ていた。アップルは村で留守番だ。

今回の依頼内容は薬草の採取。三人なので少し量が多く二十本ほど求められたが、
「トウマくんも村での生活に慣れてきたみたいだし、簡単なクエストで狩場に慣れといたほうがいいだろう？」
というのが、依頼の全貌である。ほとんど採取ツアーみたいなものだ。
ついでに交易に使えそうなものなども買い取るので、見つけたら取ってきてほしいとも言われていた。

※

「トウマくんは初めてだし、私と一緒に回る？」
一緒に集めて回っても非効率なのでバラバラに巡ろうかと相談していたところ、レティがトウマに尋ねた。ハンター生活の基本となる様々な素材が、どこで採取できるのかを教えるという申し出だった。
「あ、すごくありがたい、……けど……」
レティの隣に座る少女を見る。トウマと同じ片手剣使いのマナ。
何故か出会った当初から敵視されているのだが、今は本当に視線で人が殺せるのではと恐れずに居られないオーラを纏っている。ここで頷いたら、本気で後ろから刺されそうだ。
「……き、危険なモンスターもいないみたいだし、狩場をいろいろ見て回りたいから、採取の方はまた今度で……」
「あら、残念。いつでも案内してあげるから遠慮しないで言ってね」

隣に座る少女の視線に気づいているのかいないのか、レティはにこやかに言ってくれる。せっかくの申し出を断ったトウマもいくらか気が軽くなった。
「う、うん。次のときは頼むよ」
「……ふん」
そんな二人のやりとりを見て、マナがつまらなそうな鼻を鳴らした。
そんなマナに、地図を広げながらレティが話しかける。
「マナ。私たちは森の中に入って探しましょうか。あなたは左の道でいいかしら？」
「……うん」
「じゃあ私はこっちの真ん中の道を探すから、何かあったらすぐに呼ぶのよ？」
「……うん」
レティの言葉にも単語でしか答えない。こころなしか険悪な空気が漂っているような気もする。
（やっぱり僕のせい、だよね）
ハダンの話だと本当の姉妹のように仲がよいということだったが、マナはトウマの歓迎会に顔を出さず、翌朝、改めて顔を合わせたときにもレティとハダンの二人に刺々しい態度で接していた。
（拗ねているだけだってハダンさんは笑っていたけど、本当に平気なのかな）
危険な大型モンスターの情報は入っていないが、万が一という危険は常に付きまとう。
その時、今の二人の関係が何かしらの悪影響を及ぼすんじゃないか……。
「……さ、そろそろ出発しましょうか」
それだけが心配だった。

六人目：届かぬ想い

途中まで三人で一緒に行動した後、トウマは右側に流れる川に沿いながら山の方へと向かう。
少し開けた場所でアプトノスと呼ばれる大型の草食竜が草を食んでいた。この竜は大変臆病で、外敵となるモンスターがいるとすぐに逃げてしまう。逆に言えばアプトノスがいるということは危険ないということになる。
ちなみに肉をこんがりと焼いたステーキはほっぺが落ちそうなくらい美味い。
「……ふう、一応話に聞いてはいたけど、ここら辺は安全らしいな」
周囲の警戒を解き、トウマは森の中へ消えていく二人の少女を見送った。

※

森に入ってすぐのところに少し開けた空間がある。
頭上を見上げると木々が屋根のように生い茂って日差しを遮り、昼でも薄暗い。
こちらでは背中に苔の生えた豚のようなモンスター、モスが三匹のんびりキノコをあさっていた。
少女二人がすぐ側に来ても反応しないことわかるように、モスも大変大人しい気性をしている。石をぶつけたりしない限り、この豚はキノコ以外は目に入らないという性格なのだ。
「さっそく集めましょう」
「……うん」
モスを無視し、二人は薬草を集め始めた。
「……」
「……」

会話もなく黙々と採取をする二人。その隣をフゴフゴ言いながらモスが通り抜けていく。

※

「……じゃあ、私はっちに行くから。気をつけてね」

「……」

打ち合わせの通り狩場の中心を通り抜ける道を進もうとするレティを一瞥することすらなく、マナは森の奥へと消えて行った。

「はあ……後でお菓子でも作ろうかしら？」

ちょうど良いから途中でハチミツを採って……と考えながら、レティも歩き始めた。

※

マナが鼻息荒くズンズンと歩いていく。

（何なのよ、アイツの態度は……っ！）

幼なじみだかなんだか知らないけど、姉さんにあれやこれやと四六時中面倒を見てもらって、デレデレと締まりのない顔を晒しまくっている。

（まったく、あんなスケベそうな男のどこがいいんだろ。理解できないわ。

それにおじさんはベテランハンターを依頼したとか言ってたじゃない。アイツのどこがベテランなのよ！）

実際の狩場の動きは見ていないが、トウマは自分と大差ない――あるいは自分の方が優れているのではないか、と思う。

同じ片手剣を使っているのだ。彼の武器はハンターカリンガかハンターカリンガ改だと一目でわかる。

自分が使っているのは改の方だし、もう少し鉱石が集まれば一つ上のアサシンカリンガを作れる。武器では決して劣っていない。

ならば防具はどうかというと、やはりあの装備には見覚えがあった。
（私は作っていないけど、あれはバトルシリーズね……）
バトルシリーズ。大地の結晶と呼ばれる貴重な鉱石をふんだんに使った装備品だ。防御力もランポスシリーズと大差ない。
だが、マナのランポスシリーズと違いモンスターの素材をそれほど使用で作れるということは、『モンスターを討伐しないでも作れる』ということと同義である。
（実戦経験がどれだけあるかも怪しいわね。……やっぱりこの村を、姉さんを守れるのはわたししかいないわ！）
――自分がどれだけ穿った見方をしているのか気づかないままマナは進んでいく。

※

森の中を通る川の水が貯まり、小さな池となっている場所に出た。水飲み場でもあるこの場所には様々な動物たちがやってくる。先ほどのモスのように温厚な動物も現れるし――それを狙う、肉食竜（ハンター）も姿を見せるのだ。
（一、二、三……全部で五匹……）
ランポスはこれまでに何匹も狩ったが、今日は少し多かった。
マナが一人で相手にしたことがあるのは三匹まで。それ以上は常にレティがサポートについていた。
（……一度戻って、姉さんを……）
『――私の初恋の人なの！』
フラッシュバックする笑顔。
誓いを忘れてしまった、姉さんの姿。
（……大丈夫よ、たった二匹増えただけじゃない）

そう思うと同時にマナは駆けだしていた。

「うあああーーーっ！」

速度をのせ勢いよく振り下ろされた刃が、群から少し離れた場所にいた一頭に叩き込まれた。

――わたしはあの二人とは違うんだ！

七人目：碧い死

「ギャウウゥッ？！」
鋼の固まりを叩き込まれたランポスが吹き飛ぶ。
だが、怒り瞳に宿しながらも機敏な動作ですぐに立ち上がってしまう。少女の腕力と手持ちの武器では一撃で仕留めるには威力が足りないのだ。
そして、もちろんマナ自身そのことを十分に理解している。
一瞬の躊躇も見せず、グギャア！グギャア！と威嚇音を出すランポスたちのうち、最も手近にいたものへと切りかかる。できるなら確実に一頭ずつしとめたかったが、最初の一頭が予想以上に吹き飛び距離が空きすぎてしまっていた。

――ギャリギャリギャリッ！

横薙ぎに振るった剣先が青いウロコを数枚削りとり血が吹き出る。
だが、ランポスはそんな小さな傷に構わず、お返しと言わんばかりに噛みつこうとした。
とっさに横に転がるマナ。
起き上がりざまにまた別のランポスに斬りつけ、わずかな傷を刻んでは急いでその場を飛び退く。背後からの牙が空を切る。

――素晴らしい立ち回りだと言えただろう。見る者がいれば、あるいはランポスを相手にする場合のお手本だと称したかもしれない。
数で囲もうとするランポスの隙を縫い、あるいは飛び跳ね、地に転がり、一瞬たりとも同じ場所に留まらない。
狙って攻撃する必要などない。五つの的が向こうから当たりに来るのだから、とにかく目の前に向かって思い切り振るえばいい。
一匹も仕留めることこそ出来なかったが、全部のランポスに手傷を

負わせていくのだから、このまま順調にいけば五匹ともを狩ることもできるだろう。
（ランポス程度、何匹いてもこんなもんよ！）
マナはそう確信した。

――だが。
最初は軽やかだった動きが徐々に、徐々に鈍くなっていく。今まで一度も経験したことのない五対一という状況に、あっという間に集中力が途切れていく。
剣線がブレ始め、同時に幾度も振るわれ鋭さを失った武器がランポスの体表を滑る。
敵の牙が鎧の表面を削り、後ろから飛びかかってきたランポスの攻撃を間一髪で避ける。
「ひ……っ！」
今のは危なかった。髪が数本巻き込まれ、鋭い痛みとともに宙に舞う。かろうじて保たれていた集中が途切れる。
（……も、もしも今の飛びかかりが当たっていたら……）
目の前の敵ではなく、最悪の想像が脳裏に浮かぶ。小柄なマナは地面に押し倒され、体勢を整える間もなく次々に襲いかかる牙の餌食になるだろう。
――死ぬ。
順調にいっていたときには感じなかった恐怖がマナの心に滑り込む。
彼女がここまで明確に死の恐怖を感じたのは今日が初めてだった。
いつだって背後を守る相棒（レティ）がいて、あぶない時は必ずフォローをしてくれた。
なのに、今は彼女一人しかいない。

※

手が縮こまる。足がすくむ。
高揚感によって感じていなかった疲労を覚え、さっきまではあんなに軽かった体が鉛のように重く感じる。目の前、前後左右と不規則な動きを繰り返すランポスたちに翻弄され、いいように弄ばれている。

――クワァッッ！！
「きゃああっ！」

目の前に迫ったランポスの牙。
避けられないと見てとっさに盾で防いだ。だが、その衝撃を逃がすことができずに尻餅を着いてしまう。
慌てて起き上がろうとして、自分の腕がガクガクと震えてることに気がついた。

――怖い。

目の前に立つランポスが何倍も大きく見える。
牙の間から生臭い息が吐きかけられ、哀れな餌となってしまったものたちを想像してしまう。
今は、自分がこいつらの餌なのだ。
「あ、あ、あ……」
じりじりと後ずさるが、その分だけ向こうもつめてくる。
グギャアッ！　グギャアッ！
喜びの声をあげるランポスたち。
（……たすけて……）
逃げる気力すらなく震えるだけの獲物を囲い込み、彼らは待望の食事にありつこうとした。
「……助けて、レティ姉さん……」

※

――ヒュッッ！！

「ギャアアッッ！！？？」

ランポスの鋭い牙が、今にもマナの体に食い込もうとした、その瞬間。

風きり音とともに一本の矢がランポスの体に突き刺さった。

ピキキキッッ！

涼やかな音とともに矢が刺さった周辺が凍り始め、次に瞬間には未知の攻撃にうろたえるランポスの頭頂部に新しい矢が生えていた。

そのまま崩れ落ちる。

（この、矢は……）

冗談みたいなタイミングで訪れた救援。

「立ちなさいマナ！　早く！！」

声の主は、彼女のよく知っている相手。

「……レティ、姉さん」

※

レティの声に急かされるように立ち上がったマナ。疲労はぬぐいきれていないが、先ほどのように恐怖で身動きできなくなることもなかった。やや機敏さにかけるが本来の動きを取り戻し、彼女の死角に回り込もうとするランポスはレティが矢を射掛け牽制をする。

マナのこれまでの奮戦で多くの傷を負っていたランポスたちは、少女たちの手ににによって間もなく駆逐された。

「……怪我はない、マナ？」
周囲の気配を慎重に探り、敵の新手がこないことを確認してからレティは警戒を解いた。
今度こそ疲労でへたり込み、荒い息を吐くマナの背中をさする。
鎧越しだか、その手に込められた確かな優しさに、先ほどまでの恐怖が氷解していくのを感じる。
胸に安堵が広がり、その目から涙が零れ落ちる。
「……し、ぬ、……って……わ、わたし、しんじゃ……」
「大丈夫」
言葉にならないマナを抱きしめ、レティは母のように語りかける。
「私が守ってあげるから。だから、泣かないで」
その優しい声に、マナは大声を出して泣き出した。

七人目：碧い死（後書き）

次回の更新までが序章という感じです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4471g/

ハンター募集！

2010年10月9日13時55分発行